




心の触れ合いは自然界と

小澤 三敏

住友重機械工業相談役

平成十七年十二月に、私は古希を迎える。既に現役を退き、良き後継者の努力で会社も着実に進歩しつつあり、日本の将来についての提言をするような勉強や働きかけは全くしていない。しかしどうしても気になることが一つだけある。「心と知」と「自然環境」の調和である。

前者については、今から五年前に刊行された初亥会による「二十一世紀への架け橋」の中で、「心の触れ合い」という題名の文を書いた(京機短信 No.11 2005.03.29





どうするニッポン

古稀の憂いと願い

編著 初亥会

どうするニッポン

 ISBN4-86130-117-3
9784861301179
C0034 ¥1500E



 定価(本体1500円+税)
1920034015001 発行 日経BP企画
発売 日経BP出版センター

宇野郁夫	草道昌武	安居祥策	生田正治	矢嶋英敏
齊藤邦彦	茂木友三郎	中田一男	澄田信義	八尾俊八郎
数土直方	千速 晃	井上礼之	井手正敬	羽賀博之
和地 孝	宗雪雅幸	成島忠昭	小林公生	尾崎 護
大高善兵衛	藤本秀朗	三宅純一	森本弘道	杉下雅章
堺屋太一	丸 磐根	松尾邦彦	阪口祐男	谷口 優
福井俊彦	幕田圭一	宮内義彦	佐田啓助	小禄邦男
御手洗富士夫	村田純一	水野廉平	岡崎真雄	宮原賢次
吉村久夫	南 直哉	堀 達也	小山禎三	馬場 彰
小澤三敏	林 瑞祥	田嶋英雄	原 邦生	中野豊士
西室泰三	松尾 聰			

(初亥会会員、生年月日順)

初亥会

制度は未来永劫、絶対不変なものではない/団塊の世代は還暦をすぎても働き続ける/
「効率」「平等」「安全」だけが正義ではない/日本の人口は世界の2%、富は世界の
12%/想像力もプライドもない団塊ジュニア/"猛烈な親心"が自立心や独立心を抑
えつけた/エール大学の学生は創業者志向、東大生は公務員志向/日本はリーダーの育
成に失敗/「お、見システムが」を「お、システムが」にする/「外国人嫌い」「国際化嫌い」

政界・学界・言論界など43人の

参照)。それは、人の心が知能の発達速度に追いつかず、遂に三十年後に壊れてしまい、社会の破壊現象が起きたという空想を述べた。読者から具体例を訊ねられたが、その時点では事例を想像することが出来ずにいた。また、知能の向上に費やすのと同じ時間を心の発達に使うという解決論は、現役で飛び回っている超多忙の経営者からは、隠居の戯言と笑われもした。

しかし二〇〇二年になり、例の九・一一事件が勃発、二〇〇三年にはその報復的なイラク戦争が起こった。今までにも多くの戦争が起こり、今以上に多くの犠牲者を出しはしたが、どちらかの責任者が参ったと言えればお互いの憎しみは残ったとしても破壊活動は終了した。しかし今回は一方の責任者は捕らえられたが、人間同士の殺我が続いている。宗教や覇権の歴史の観点からは私の知識の及ぶ所では無いが、敢て読者が聞きたがっていた心の破壊の予兆例として考えたい。

先進国でも例外ではない。身近な例では株主至上主義の氾濫である。株さえ持てばその会社を支配出来るとの思いや瞬間風速的株式時価総額がものをいう経済界は心不在である。経済力最優先の思想は人間の行動をますます知能重視に走らせ、経済的成功と失敗を繰り返すであろう。問題はその結果起こる人の心の廃退と環境破壊であり人間不信である。私は知能の向上に反対しているわけでは決して無い。

しかし心の向上と余りに懸け離れた使い方をすると、人と人との信頼を失い生活の土台である自然界をも崩壊することになる。今産業界の中で成功者といわれる経営者たちは、心と知のバランスをうまく活用している。しかしその目標と結果は事業の経済的成功であり、終了すると安堵と空しさと破壊が残る。数少ない心の持ち主が自然破壊の穴埋め策を提案するが焼け石に水である。

この記事中の地図・写真等は、本文と関係ありません。

Education

投資教育

■金銭教育

■米国では幼稚園から勉強

http://kazkawaguchi.com/edu/edu_03.htm

最近、福岡にある標高千二百メートルの英彦山に登った。三大修験道場として栄えた霊山で、新日本百名山の一つに数えられている。さすがに険しく古希の老人には六時間の登山は相当堪えたが、自然の猛威で倒れた大木を跨ぎ、せせらぎで小魚を発見し、雑木林で囀る小鳥を探し当てたりして心が洗われた。ただ近くの大半の山々は整然と杉が植えられ、外から見ると青々とした自然色の山々であるが、中に入ると草花は勿論小鳥や小動物の気配すら無く不気味な林の塊であった。数十年前の知恵が動植物を追い出し、人間の肉体には花粉症という危害を加えている。

さて、提言に入る前に、たぶん私の空想に影響を及ぼしている幼少時の体験を少し述べよう。私は神戸の海が近い本山村で生まれた。家の近くにはコンクリートの道は無く、小さな小川に魚が泳いでいたり、白い砂浜の海岸であった。小学校、中学校を九州の宮崎で過ごした。途中終戦を迎えたが、のんびり



りした自然に恵まれ、半分以上の時間は地元の子供達と親父の酒の肴になる魚や小鳥を捕る為の知恵に使われた。また、弟への虐めに対し母親から親父の着物の帯で柱に縛り付けられた。今思うに子供の行為にはちゃんと目標があり、それは自然界と繋がりを持っていた。釣果で親父からはめられたり常識を逸脱したら母から叱られたり、子供の間では喧嘩による強弱や知恵のレベルで自ずと序列が出来たりと、表現しにくい心があった。私の心と自然環境への思いはここがルーツのようだ。

その後中学の終わりに突然の転居で高校、大学は京都で過ごしたが、田舎から都会への文明の急激な変化を覚えている。大半は知識の吸収で、心の触れ合いは徹夜の実験やダンス部、写真部等のクラブ活動を通じて行われたが、子供の時ほどでは無く、ましてや自然との付き合いは少なかった。読書による感激は私の場合自己満足の範囲で、心の交流にはあまり役に立たなかった。

成人になってからの機械製造業での人生は、すべて人々の知とそれを実現する心に支えられた。ここでの不満は全く無い。ただ今のままで突き進むと我々の成果が自然破壊に関係したり、外部の産業構造変化で生活の基盤が揺るぎ、これを繰り返しているうちに心が荒み、萎縮し、破壊しかねないと強く反省している。さて提言に入ろう。

人間活動は心と知で行われており、両者の向上努力は行われているが、目標値や結果が分かりやすい知能に偏りすぎていることは幾度も述べた。そこで連続的に心の向上を図る場として「自然界」に目を向けることを提言する。人間社会とは違う途轍もなく大きな、ゆっくりした流れの自然界と心で触れ合うのである。人間同士は

知の会話ではなく心の会話を試みる。 動植物とは現場で接し、その錠を、その心を、人の心で感じる。 知識は必要であるがあくまで従である。

私の言う「心の触れ合い」の相手は自然界である。日本人は幸いにも変化に富んだ自然の中に居る。 豊かな海、多くの島、美しい山河、四季の変化、寒波や台風、地震等の自然現象、多種の農産物や海産物等、上げれば限りが無いほどの自然がある。 そして一億人を超す心優しい生真面目な人々が居る。

我々日本人がこの豊かな自然の心、しかし破壊で悲しんでいるかも知れない心と対話することで、人の心の向上を試みる。 心は幼少時の刷り込みが必要である。 現在の日本人は団塊の世代ぐらいまでが自然との対話の経験があると思われ、働き盛りの三十代四十代はテレビや塾通い、更に若くなれば携帯電話やゲーム等で自然の錠の刷り込みが出来ていない。 また都市に集中して住んでいる。 改善ステップは長期戦である。 幼少時の教育は勿論知識の向上は必要条件であるが、それと平行して心の向上を全国展開する。

幸い都道府県があり、それぞれに素晴らしい自然がある。 ここは知恵を出して貰いたい。 日本人は政治力や突飛なアイデアを出す町は弱い、自然と対話して向上した豊かな心で、世界の人々の心の破壊を食い止める活動を始めることは出来る。

さて、一度は三十年後あの世から眺めている良き光景の文で締めたが、IR西日本の福知山線で百七名の死者が出た大惨事が起きたので、取り消した。 私の言う事例の一つで、一企業だけの問題ではない。

合掌。



—— 京機短信への寄稿、 宜しくお願い申し上げます ——

【処理要領】

宛先は京機会の e-mail : jimukyoku@keikikai.jp です。

内容的にOKの寄稿については、記事を「京機短信」の所定ページに収めるための編修的修正をエディターが勝手に行います。 ページに収めるための大きさの修正が難しい原稿は自動的に掲載が遅れ、あるいは、掲載不能となります。 発行までの時間的制約、ボランティアとしての編集実務負荷の限界のため、原則として、発行前の著者へのゲラプルーフは行いません。

15 資源問題とブレークスルー

(つづき)

石田靖彦 1964 年卒
<isiyas@aa.bb-east.ne.jp>

資源問題も、望み通り問題を解決する技術の見通しが現在ないからこそ問題になっているのである。理想的な革新的技術が将来絶対現れないと断言することはできないが、いつ現れるかは全く予想がつかないし、少なくとも近いうちに資源問題を解決し、しかも現在のように便利で豊かな生活を続けることを可能にする、都合の良い技術が現れる可能性はまったく見えない。問題を解決するために技術革新が必要だという結論は、技術開発に一層力を入れよという意味はあっても、そうすれば問題が必ず解決できるわけではないから、そうして柵からぼた餅のような幸運を待つことが必要だと言うようなものである。技術革新必要論の最も悪い点は、人々に将来の幸運を信じて安心させ、問題から目をそらさせ、大量消費経済のはかない夢を追い続けさせることである。

期待したような技術革新が起らなければ、安価で大量に非再生可能資源を供給し続けることは次第に困難となり、価格の上昇は避けられない。需要は価格の上昇につれて減少するから、完全な枯渇に至らないという説は間違いではないだろう。しかし、最後まで掘り尽くすかどうかは資源問題の本質ではない。問題は、それまで大量に使い、人々の生活や社会の成り立ちに深く入り込んだ資源が、価格上昇のために使えなくなることである。資源の減少と価格上昇が長期間にわたって少しずつ進行し、社会全体がそれに適応して行ければよいが、資源の私有と市場経済の下ではそうはなり難く、資源価格の急激な上昇によって社会が混乱し、貧しい者や弱い者から先に大打撃を受け、不公平が増大して正義が後退することはほぼ間違いない。

資源は不足も枯渇もしないという主張が、大量消費経済を維持したいという願望から来ていることは明らかである。本当に資源が不足すれば、混乱なくそれに対応することが出来ても、経済全体は縮小せざるを得ないであろう。資源問題が大きくなって世の中が本格的な省資源化に進むのは、現在の経済を信奉する人達にとっては不都合である。このため現実から目をそらし、技術革新という救いの神が必ず現れると思込み、人々にもそう思い込ませようとする。豊かな生活に慣れた人々もまた喜んでこの説を信じようとする。この大勢の中では、技術には技術の限界があるという当然の真理を述べても、悲観的だという便利な言葉で一蹴されてしまう。技術への過剰な依存をやめてもっと簡素な生活にしようという主張も、それでは進歩でなく後退だと否定される。一般に楽観的は肯定的で、悲観的は否定的な印象を与え

る。人間の進歩とは何かという本源的な問題を棚上げにして、より複雑巧妙な技術に頼ることが進歩だと盲目的に信じられている。そういう通念の中で悲観的だ、後退だと言われることを恐れ、敢えて楽観論に立ち、新技術に期待する態度を示す人も多いのではないかと思う。しかし、現実を認めることを悲観的と呼び、現実を無視して夢を見ることを楽観的と呼ぶのは、言葉の正しい使い方ではない。前者は悲観的でなく客観的であり、後者は楽観的でなく主観的なのである。このような誤った楽観は無知や思慮の不足、時には無責任から来ることもある。本当の楽観とは、どんなに望ましくない事でも、人為的な不条理によるものでない限り現実を素直に受け入れ、逃げたりくよくよしたりしないことだろう。また、人類の得た経験と知識に基づき、技術過信でなく、技術の使用を自然環境が人間に与える条件に適応させ、持続可能な社会を造ることこそ、本当の進歩と言える。

絶え間ない拡大を求める現在の経済では、技術の目的もまた大量消費である。省資源技術と雖も、結局はより多くの商品売るためであって、市場原理は全体の資源消費を下げる方向には働かない。技術改善によるエネルギーの効率の向上や材料の削減が達成できても、それが一層製品の普及を促進する。効率がよくなった分だけ製品が大型化・高機能化されることも多い。そのため、結局は省資源化技術の進歩によって社会全体の資源消費は却って増大する（rebound 効果）。省資源技術の中には一部の電子機器のように、付加価値を落とさず目覚ましい小型化と高性能化を同時に成し遂げた製品もあるが、希少資源の使用が増えている。それでも情報機器はむしろ例外で、機器類の多くは機能が大きさや資源の使用量と関係するので、機能拡大と小型化が両立しない場合も多い。したがって、性能・機能の向上を求め続ける限り、省資源化は極めて難しい。

経済界では将来の利益は非常に大きな割引率によって小さく評価され、10年先の利益は現在から見たらほとんど無価値に等しい。企業人にとっても自分が在職している間に最大の利益を上げることが先決で、引退した後のことには知らぬ顔をする。資源会社も資源のあるうちに最大の利益を上げようと、本当にせっぱ詰まるまでは、資源の減少を公表したがるまいであろう。資源問題がより深刻になるのは、現在の市場に何の発言権も選択権も持たない、次世代の人々である。このように、市場原理は、資源の減少を正しく反映しないので、市場原理が適切に対応するから資源の不足は生じないという理論には、疑問を禁じえない。資源不足の時代が来ることを軽視したまま市場の成り行きにまかせれば、その時になって事態が急変し、多くの人が苦しむ。資源不足時代に備えて計画的に社会を変えてゆくことが必要である。「足るを知る」は古代からの最も優れた知恵の一つである。物質が有限であることは考えるまでもなく当然であるが故の悟りである。人間が手にすることのできる物質の有限性は現在も全く揺るがない真理だが、技術がそれを打ち破ったと錯覚し、数千年の知恵を捨ててしまったのは進歩でなく後退ではないだろうか。

— ご注意 —

最近、また、京大学生新聞会（？）から設立130年記念事業と言って、新聞の賛助購読依頼なされている可能性があります。

しかし、これは、京機会が一切関知しないことです。

事実がわかれば、それら新聞には抗議をしていますが、何年か経つとまた、と言う状況があります。

京大には京都大学新聞と京大学生新聞があります。

一方は大学内にオフィスがありますが、もう一方は、外部にあります。

それらを発行している組織の背景についても、大学が関知しないところがあります。

それらについては、インターネットなどで調べてください。

— お知らせ —

来る9月13日から16日の日程で第四回学生フォーミュラ大会が開催されます。場所は静岡県の小笠山総合運動公園 (<http://www.ecopa.jp/>) です。

昨年、一昨年に比べて交通の便が格段に上がり、東海道新幹線の掛川駅からは電車で一駅、徒歩15分に位置しています。

大会参加校も今年は51校を数え、また海外より3校の招待校の参加など、ますます活気溢れる大会となっています。

是非ご見学、応援に来ていただければと存じます。

京機会名簿に掲載する個人広告を募集中です

京機会では、3年ごとに会員名簿を発行しておりますが、今年が新たな名簿の発行の年にあたり、12月の発行（予定）に向けて現在準備を進めているところです。

現在、この名簿に掲載する個人広告を募集しています。個人事業主の会員の方の広告、同期会の広告、個人の近況報告等にご利用いただけます。

掲載料は5,000円、お申込みは平成18年8月31日までとなっております。詳しくは京機会のホームページをご覧ください。

<http://www.keikikai.jp/index.html>

この度の名簿発行に向けまして、名簿専用のホームページも開設いたしました。名簿に関する情報を順次掲載する予定ですのでどうぞご覧ください。

http://www.keikikai.jp/honbu/gyouji_meibo_frame.html

なお、名簿掲載広告は、個人広告のほかに企業広告も併せて募集中です。詳しくは、上記ホームページをご覧ください。

名簿担当幹事（横小路）

×特許事務所

弁理士 京大太郎
(19??年卒業)

〒123-4567
京都市*****
電話
ファックス
E-mail

個人広告の一例

